
変節

北角 三宗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変節

【Nコード】

N0073Z

【作者名】

北角 三宗

【あらすじ】

戦国時代、南奥州塩松。

大内定綱の前半生を描きます。

塩松は強国に囲まれた小国なれこそ、周辺諸氏との外交関係で以って体制を維持していました。

定綱は主家石橋氏を放伐し、「塩松殿」の名跡を継ぎます。その後も、情勢を読んで他家を翻弄し、勇躍の時を迎えんとするのですが……。

弘治の頃（1555～58）。塩松は小浜城。

ある昼下がり、大阿弥丸は私室にて、傳人と共に史籍の回読をしていた。

「——壬午 入 吉野宮 時左大臣蘇我赤兄臣 右大臣中臣金連
及大納言蘇我果安臣等送之 自菟道返焉 或曰 虎着翼放之 是
夕 御嶋宮——」

『日本書紀』巻第二十八、天武天皇の即位前紀の件である。

大海人皇子は、この大津を出た翌日（天智天皇十年十月廿日）に吉野へ入り、翌年夏までの半年余りを当地にて頓居する。そして、病床にあつた天智天皇が死んだ後、遺児たる大友皇子が自分を弑しようとして計画していることを知るや、僅かな兵を率いて打倒に立つ。そして諸勢力を糾合しながら北へ攻め上がり、拳兵からひと月後には大津朝を滅ぼしてしまう。

寡兵にて立ち、大敵に当たってそれに打ち勝つ。

英雄譚はいつの世も子供の心を惹き付ける。

大阿弥丸もその例に漏れず、退屈な話の羅列に見える『日本書紀』の中で、ここからが最も好きな箇所にあたる。この分冊ばかりはもう幾度も読んでいるのに、心は逸った。

そのとき、父の小姓がふすま越しに声を掛けた。

「お父上様がお呼びです」

大阿弥丸は落ち着いた表情で頷いて見せたが、回読の腰を折られ

たことに不快を得、不意の呼び出しに戸惑い、思い浮かばぬその用件を訝しんだ。そして父の書斎へ歩を進めるに伴い、心が石のように重くなってゆくを感じていた。

父にしてみれば、いずれ自分の名跡を継がせることになるであろう嫡男のこと。一族の繁栄、そして主家の栄耀の道を託すことになる以上、万事につけ、高みを目指す気持ちを持ち続けるようにと、薰陶してきたつもりだろう。妾腹の子も幾人かいるが、正妻腹で長男となれば、次代の惣領となることはもはや誰の目にも疑いない。

大阿弥丸には、そんな父の評価が狭い見に捉われているように思われ、殆ど顔を合わせぬ日などないにも関わらず、肉親にも関わらず、馴染むことができないでいる。父の気持ちが解らぬ訳ではない。ただ、惣領としては兎も角も、次代の筆頭家老と言われても、ピンと来なかった。

主君には男子がない。とすると、いったい自分は誰に仕える為にこのような教えを受けているのだろう、という疑問がずっとあったからだ。

ただ、斯様な期待は余計なお世話と感じつつも、書物も弓馬も嫌いな性質ではないことから、常に自ら進んで鍛錬している。そんな前向きな姿勢に対してまでも更なる啓蒙を求めてくるものだから、一層父を避けるようになっていたのだった。

大阿弥丸は書斎に入って父に対座すると、暫くの間その凝視に晒された。父は珍しいものでも見るように、目を丸くしてジロジロと大阿弥丸の容貌と所作を細見している。

その、いつもは見せぬ父の仕草に、どこか殺気にも似た鬼気迫るものを感じ取った大阿弥丸は、頻りに逃げ出したい衝動に駆られたが、正座した膝の上で拳を握り、じっと我慢していた。

父がおもむろに口を開いた。

「其方を、……養子に出すことにあいなった」

父の膝下の辺りを見つめていた大阿弥丸は、その言葉に対し反射的に目を上げた。耳を疑って問い質したかったが、呑んだ息が継げなかった。

父の後継者となることを疑わなかったからこそ、今の自分がある訳で、それを否定されてしまつては、致仕・放逐と一緒にだと思った。

父が言葉を継ぐ。

「――殿の婿となる」

「……えっ？」

漸く言葉が出た。

主君には、女子も一人いるきりだった。名を志保という。その母は父の妹、つまり大阿弥丸には叔母に当たるので、この女子とはいとこ同士ということになる。

この志保姫は大阿弥丸より少し年上で、主君はこれに婿を取るべく周辺諸氏に様々働き掛けてきたのだが、なかなかまとまらないでいた。

大阿弥丸はずっと、自分はその姫君の婿に入つた者の家老になるのだという、漠然とした思いで系図上の彼女の位置付けを意識しており、彼女自身というものに関心を払つたことなどこれまで殆どなかった。ただ子供心に、まだしつかり見たことのない姫君のことを、その縁遠さから、余程の醜女なのだろうと勝手に思っていた。その程度の存在である。

自分がその婿に入るとは、ゆくゆくは名代にでもなり、姫との間に生まれる子供に「塩松殿」の名跡を譲る役回りになるということ

である。

大阿弥丸は何とも実感がなく、半ば放心状態の父に倣って神妙に座っていた。

1（後書き）

初投稿なので、行間の空け方や1回分の長さやら、手探りです。ご了承ください。

塩松は、南奥州安達郡の東半部にある地名であり、地域の総称でもある。同郡西半部の二本松とは郡の中央を縦断している阿武隈川を境とし、北は伊達郡小手郷、南は田村庄に接する。東の山岳地帯を越えると、相馬領の行方郡や標葉郡に通じる。

地勢は、郡東端にある日山を最高峰として中小の山岳が乱座し、西方の阿武隈川へ近づくに従い平地が広がる。山岳の谷間を縫うように川が縦横に流れ、それらはいずれも阿武隈川へ注ぐ。小浜川は塩松の中央を南北に縦断、口太川は塩松の東部から南部へ大きく囲繞するように西流する。この両川は小浜北方にて合流、更に阿武隈川へ注いでおり、この二つの川に平行して主要道が走っている。

戦国期、塩松は石橋氏の領分となっていた。石橋氏は足利一門として室町前期に奥州へ下向し、塩松に土着した名族である。

塩松は石橋氏以前から、宇都宮氏や吉良氏といった名門が拝領していた由緒ある土地柄で、石橋氏もまた、二本松の畠山氏と並んで南奥に重きを為していた。

石橋氏の居城は、住吉城と塩松城の二つが本城として存在する。両城は口太川を挟んで東西に隣接しており、蛇ヶ淵の渡しや幾つかの小橋で連結している。そしてそれぞれ東の新殿、西の小浜などの城砦に向けて街場が展開され、本城を中心とした防衛圏とでもいえるべきものを形成しており、重臣の居館の多くがその範囲に収められていた。即ち両城は、周辺部も含めて広大な一つの城域、それぞれを曲輪・出城という位置付けとして把握することができよう。

大内定綱は天文十五年（1546）、塩松の小浜に生まれた。父

は石橋式部大輔尚義の筆頭家老、小浜城主備前守義綱。母は常州太田城主佐竹義篤の娘という。幼名は大阿弥丸。幼くして才気が走り、性は淡泊にして礼を重んじ、大声を出して騒ぎ立てるようなこともないが、かといって沈鬱な風情もなく、いつも気付くとその場の空気に馴染んでいる。一方で伶俐な面を持ち、親しい朋輩や近習の些細な誤りであつても厳しく咎め立て、自ら裁くことを快しとする趣もあつた。

大阿弥丸の名は、石橋家が篤く帰依している時衆に因る。

天文初頭、尚義の父先代定義は隠居後入道して静阿を名乗り、居城住吉城域に十願寺金山道場を開山、塩松に於ける時衆の根拠と爲した。その影響によつて、嫡男の尚義はもとより、家中諸士に至るまで時衆を嗜んだ。何阿、何々阿という名を好むのは、時衆の特徴である。即ちそれが大阿弥丸の命名となつた次第で、石橋家中ではこれまでもしばしば用いられてきた幼名である。

隠居後も大御所として内外の政事を中心に居座り続けていた定義が天文十四年に死ぬと、当時その筆頭家老の地位にあつた義綱の父義生も後を追つて腹を斬つた。

かくして、慌しく政権の世代交代が遂げられ、前もつて尚義付きとなつていた義綱の時代がやってきたのである。そんな中での嫡男の誕生は義綱にとつて、政権掌握に花を添える、洋々たる未来を約束するものと感じられたに違いない。

しかし、時代はその祈りとは反対に混迷の一途を辿り、やがて塩松にも暗い影を落としてゆくことになる。

当時、巷では伊達植宗・晴宗父子の相克、所謂「伊達天文の乱」が南奥羽全域を席卷していた。

この擾乱は、天文十一年に晴宗が植宗を当時の伊達氏本拠西山城

に幽閉したことが、発端となっている。父子不和の原因は様々取り沙汰されているが、争乱に至る直接の原因は、植宗の三男時宗丸が越後国守護上杉定実の養子となるに当たって、植宗がその護衛として精兵を多数付けようとしたのに対し、晴宗が異を唱え入嗣自体を阻止しようとした為とされる。

晴宗の思惑は一応遂げられたものの、事態は思わぬ方向へ進んだ。幽閉されていた植宗はその寵臣小梁川日雙によって救出されると、周辺諸氏の協力を得て反撃に転じたのだ。

伊達家中には晴宗を支持する者が多かったものの、周辺諸氏の多くが植宗を支援したことから、開戦当初は植宗党の勢力が晴宗党を圧倒していた。その主勢力となっていたのが、田村隆顕・懸田俊宗・相馬顕胤といった植宗の女婿達や畠山家泰・義氏兄弟・石橋定義などである。この中でも老練な定義は、所領が彼らの中心に位置することもあって、諸勢力間の連繋を取り持つて糾合するのに大きな役割を果たしていた。

しかし定義の死後、残された尚義に父の代役は果たせず、植宗党の足並みは次第に乱れていった。そこへすかさず晴宗が内応の手を差し伸べたものだから、諸氏家中内部で対立関係が生まれ出した。各々自領内の平定に力を尽くさねばならぬ状況となり、植宗への協力を控えざるを得ない者が多くなる。その為、元々伊達家中では支持者の多かった晴宗の方へ、一気に流れが傾いていった。すると諸氏の間でも、その動きに敏感に反応した者から次々と鞍替えしてゆき、その傾向に拍車を掛けた。

塩松でも、義綱が中心となって逸早く晴宗支持を表明、亡父の遺志を尊重して植宗党に固執する尚義へ否を突き付けた。そして次々と家中諸士を糾合していつて主君の手足を奪い、最終的に尚義に晴

宗と誼みを通じさせるに至った。

この騒乱は結局、同十七年秋に至り、足利將軍からの重ねての和睦命令に従う形で終結を迎えた。但し、終結したのは父子相克のみであり、そこから派生していた数多の対立関係は、その後も延々と続くことになる。

この争いが奥州に於ける戦国時代の皮切りとされる所以である。

その中で大阿弥丸は、僅か安達半郡の塩松を守る為に汲々とし、ときには下手な謀略にまで手を染めている父の姿を、鼻先しか見えぬみづちい男として他山の石と見なしながらも、心の奥底では本人の気付かぬ内に鏡として培っていた。

暫くして好い日を選び、大阿弥丸は塩松城へ遷ることになった。

小浜城を出るに当たって、父義綱が言った。

「其方がこの家を出、主家の養嗣子になったとて、儂の子でなくなつた訳ではない。父親が二人になったと思うがいい。今後は一層自らを律し、塩松殿の後嗣たらんとせよ」

尚義が穏やかな人柄であるだけに、義綱は息子が甘やかされるのを懸念しているようであつたが、大阿弥丸にしてみれば甘やかされたとしてそれに溺れない自信はあつたし、今後この父の束縛から解放されることに心が浮き立つばかりだつた。

兎も角も大阿弥丸は、かくして塩松城に入つた。そして日を選ぶと、同地にて元服を執り行い、太郎左衛門齊義と名乗つた。

かつて尚義の先代定義は、嫡男尚義に跡目を譲つた後も大御所として住吉城に君臨し続けていた。その為、尚義は当主となつた後も、それまで数代の間二の丸的な位置付けとなつていた塩松城に差し置かれていた。

だが尚義は、定義の死後も継続して塩松城に住み続けたことから、逆に住吉城は二の丸、或いは大奥的な位置付けとして扱われるようになっていた。

齊義は義父に随つて塩松城に部屋を与えられたが、内心は住吉城の方が居心地が良く、こちらに居を取りたかつた。

その理由の一つとして、住吉城の書庫には埃を被つた蔵書が沢山あり、齊義はそれを思う存分に読みふけりたいというものがあつた。

城内は人も少なく、また二人の父にかまわれることもなかったことから、一人を満喫できる、落ち着ける場所だった訳である。

斉義は、志保姫との婚儀を済ませ、初めてその姿をはっきりと見た。

かなりの痩せぎすで、髪も多少くせつ毛はあるが、思っていたような醜女には見えず、肌も白いし目鼻立ちも至って普通の女だと感じた。ただ、話をするとき少しもりがあり、知性の面でも父親を受け継いだのか向学心といったものは余り感じられず、斉義が改めて興味を惹かれる部分は別段なかった。

さりとて斉義はこの頃まだ女色の経験がなく、その方面の欲望もさほど強くないということもあるのか、彼女に対しては別段の不満を持たなかった。ただ知識として、「これが醜女である」と頭に詰め込まれただけのことである。

何にせよ彼女の存在は彼にとって是非もなく在るものであり、「こういうものだ」以上のものにはなかなか昇華し得ないものだった。よって暫く経ってからの初めての床入りの後になっても、その感覚は当面改まらなかった。

姫の方でも、自分のような容姿が醜女であるという知識を持っているのか、深い情を斉義に求めることはなく、よっていつまで経っても子を成さなかった。尤も、貧弱な彼女の肉体で子供を宿せるのかということは、甚だ疑わしいものだが。

互いにそんな状態では、とてもすぐに睦まじい関係が築ける訳もなく、斉義が時折通ったぐらいでは、なかなか会話が弾むようにならないかった。

それでも斉義は、姫のところへ定期的に通った。それは新婚としては極めて少ないものだったが、双方から不満の類は一切出てこな

いことから、両家の父母とて何も口を挟めなかった。

数年が経った。元号は永禄（1558〜70）に代わっている。

齊義を乗せた馬は領内を駆け回っていた。すぐ後には数騎の供が付き随っている。

主要道は元より、裏道細道はおろか獣道に至るまで、塩松中の道という道を彼らは既に精通していた。

道の傍らで農作業をしている領民達は、彼らが通り掛かるとニコリと微笑んで頭を下げる。彼らは領民からの評判が良かったのだ。

齊義が主家に入嗣して以降、領内武士団の特に若衆が皆、彼を鏡と為したことから、自動的に綱紀肅正が行われ、全体的に質が向上した。その結果、齊義へ領民の感謝が集まった次第である。

勿論、初めからそう巧く行った訳ではない。

入嗣間もない頃の齊義は供を連れることを嫌い、単騎で遠駆けなども平気でしていたものだった。それに対して周囲は、頻りに軽拳と諫め、供を具すように言った。

だが齊義は、斯様な心遣いは却って迷惑だった。

家臣たる近習らは、万事体裁を気にして遠慮するものだから、気分がだらけて一向にのってこない。加えて齊義の方でも、近習に気を遣わせまいと逆に気を遣ってしまうものだから、無駄に疲れるのだ。

そこで千思万考の末、少しでも気を遣わずに済む親族を近習の中心に据え、重用することにした。第一が助右衛門親綱で、第二が長門義員である。

親綱は斉義にとって、腹違いではあるが同年の弟である。

幼い頃から何故かこの取っ付きにくい兄を慕い懐いており、元服して義綱の新たな後継候補の筆頭となった後も、毎日のように兄の許を訪ねては付いて廻っている。

斉義も、彼のことだけではどんなときでも邪魔に感じないことから、これも彼の能力と思って評価し、父達が何も言わない限り好きに居させた。

周囲からはよく似た兄弟と媚びた声も喧しかったが、そう言われると何だか彼に申し訳ない気がして、逆に気が重くなった。

周囲によく気を配りよく笑う、人懐こい性格から、家中の皆に好かれた。

長門は義綱の従弟義円の子である。

幼い頃から、信夫・伊達を中心に修行する山伏となっている父に従って、山を棲処としていたのだが、斉義が尚義の養子となる祝いに訪れたときに、お付きの者として請われ還俗し、小浜城下に屋敷地をあてがわれていた。

その出自の故か気性は荒く、斉義を主筋と敬う姿勢も少なかったが、斉義にはそれが却って心地良かった。

それに、彼は山を熟知しており、一緒に遠駆けをしても得るものは多かった。よって斉義は、彼のことをある程度敬意を払って接した。

元々の粗暴な振る舞いや性格が改まることはないものの、寵を驕ることもなく、農繁期には野良仕事の手伝いにも進んで精を出している。その故に領民や仲間内から特に好感を持たれた。

この二人を近侍させるようになってから、他の者の斉義に対する態度に少しずつ変化が顕れ出した。つまり、二人を緩衝として御前にてもそぞろに振舞うようになり、更には二人を参考として自然に

接するようになっていったのだ。

だから本当のところ領民達は、彼ら二人に感謝すべきなのかも知れない。

城に戻ると、馬場まで尚義の小姓が迎えに来ていた。

「大殿がお呼びでござります」

斉義は馬番に手綱を預けると、足取り軽く義父の許へ向かった。

案の定、尚義は斉義に甘かった。

待望の後嗣であるから致し方ないとはいえ、ねだられるままに、否、ねだられずとも、ねだられたもの以上に、贅を尽くした馬具や当世具足、更には当時まだ奥州では珍しい鉄炮まで取り寄せたりと金に糸目を付けずに買い与えていた。

「お呼びですか」

尚義はいつにも増して上機嫌に、入室してきた養嗣子を迎えた。

石橋尚義は世間では暗愚と蔑まれていたが、義綱を始めとする重臣がよく補佐しているのか、決して家中や領内が乱れている訳ではなく、戦乱の打ち続く他領に比べれば寧ろ平穏だった。

ただ確かに尚義は斉義の目から見ても、能力的に恵まれているようには映らなかったし、自己を高めようという野心が強いとも感じられなかった。

ただ、無闇に周囲へ気を配り、民や家中を労わろうという気持ちは強くて、愚よりは鈍の方が当たっていると内心思っていた。

側女の酌で赤くなった顔を弛緩させ、手を付いて挨拶した斉義に新しい盃を渡すと、手ずから酒を注いだ。尚義は決して上戸ではないが酒好きで、呑むと途端に饒舌になる。

斉義は話が長くなる覚悟をした。

「おことの初陣が決まったぞ」

齊義は口を付けた盃を一気に乾すと、両手を胡坐の膝にあてがい、神妙な顔で義父を見つめた。尚義が続ける。

「——伊達家の騒動は、おことも聞いておろう」

「……はい」

——南奥の戦国時代は、やはり伊達氏の動向抜きでは語れない。

永禄初年以降、伊達晴宗は惣領の座を保有したままで、実権を後嗣総次郎輝宗へ徐々に移行させてゆき、自らは羽州米沢から信夫郡杉目へ遷って、伊達氏の本貫から周辺へ目を光らせるようになった。

これは、晴宗が当主となった際に伊達郡西山から米沢へ本拠地を遷して以降、当地方に相馬氏や畠山氏を始めとする他氏から侵略の目が向けられるようになり、周辺の伊達麾下諸将にも不穏な空気が漂い出していたことに起因する。

その一連の動きの中でやがて、伊具郡北部の伊達一門田手宗光に相馬を後ろ盾にしていると思われる謀叛の嫌疑が掛かった。

それに対し、輝宗が中途の刈田郡まで出兵して弁明を受け付けたところで、晴宗は「軽拳を避けるように」と輝宗に諫言すべく、伊具郡境の石母田まで出張った。

このとき、晴宗出張の報に接したその老臣中野宗時が、勝手に主不在の米沢にて防備を固め、事態の推移次第では宗光と共謀して輝宗を挟撃しようとしているのではないかと思わせる、疑わしい動きを見せた。

輝宗はこれを一連のはかりごとと判断し、晴宗に対しても不審の目を向けるようになる。身の危険を感じた晴宗は伊達郡東根の保原まで退き、周辺諸氏に籌策を求めた。

現況は、今後の展開次第では、天文以来の大乱にまで発展する危

険を孕んでいた。

齊義はこの事態に関して、尚義の意向に対し家中諸士がこぞって出兵反対を主張していることまで知っていた。遂に尚義が我意を押し切ったのだと察すると、気が重くなった。それが神妙な顔の意味である。勿論尚義は気付かない。この後嗣は自分に異はなかうと信じきっているかのようだ。

「伊達殿からは是非にと請われては、どうして断れよう」

「義父上が私を伴い伊達殿の処へ赴くのは、承りました。されど……これは戦さを避ける為のものでありましょう」

「それは勿論だ。名目上は和解籌策だが、当地へ赴くに当たり、三十騎ばかり出張ることとした」

「何も御身が直接に出張らずとも……。書簡にても用件は果たせるのではござりませぬか。三十騎とはいえ諸士準備に追われることにもなり、出費も無駄に嵩みましょう。また此度の伊達家の騒動、あまり他家の者が口を挟む類のものではないのではと――」

「おこと自身は、自分の初陣を如何思うておる。勿論、戦さにならぬが最善ではあり、戦陣を目の当たりにすることはないかも知れぬが、場の雰囲気を知ることではできよう」

「私に晴れの間を設けてくれようとする義父上のお気持ちは有り難く、また嬉しく感じております。今後行く末を思えば、伊達家中に顔を売る効果もありましょう。されど……」

尚義は満足そうな顔をして、齊義の言葉に割って入った。

「さもあるうさもあるう。おことならば、そう言うてくれると思つとつた」

そして尚義は、このところ酒を呑むと毎度口癖のように語って聞かせる話を、ここでも繰り返すのだった。時折ろれつが廻らなくなるものの、いつも言っている文言だけに、言葉の選択が次第次第に洗練され、まるで何かを読んでいるかのようである。

「かの天文の大乱の折、諸家中面従腹背にして叛腹常ない有り様だった中、ご先代の塩松のみは平静を保ち、伊達家の和睦調停に重きを為しておった。されどご先代は志半ばにして病に斃れ、残された儂は若輩にしてその能力ご先代に及ぶべくもなく、大乱は当家中にまで浸食されることとなってしまった。今度こそ伊達家の内紛を調停しおおせ、ご先代の遺志を貫かん」

尚義はそこまで一気に言うと、満足した顔で盃を口に運んだ。

義綱らも、尚義にそう言われては、そもそもあのとときに主君へ否を突きつけたという後ろめたさがあること故、重ねての反対はできなかったことだろう。

斉義も、これ以上何を言っても効果のないことを悟った。

日を選ぶと、尚義は留守を義綱に任せ、もののしく出陣した。

一行は塩松を出ると、川俣を経て月見館へ至った。

伊達郡内では広瀬川の流れに沿って北上する。即ち、三春方面から塩松・川俣・懸田を経て梁川で仙道の本街道と合流する、「小手道」と呼ばれる南奥州を縦断する脇街道として古来重要視されている道である。

川俣領主桜田氏は伊達氏の麾下ではあるが、比較的自立性が強く、周辺の領地は自治領となっている。よって、川俣・懸田の中間点に当たる月見館の地峡部から、本式に伊達領となる。

天文末年に晴宗が当地方の領主懸田俊宗を滅ぼす以前から、当地は要衝として重要視されており、伊達治下になってからは更に新たな城砦や関所が築かれ、街場も大きくなっていた。

その理由は勿論、塩松への警戒ということもあるにはあるが、それよりも相馬に対する備えとしての色が強い。

即ち、月見館南北麓から東へ向けて、海道まで通じる二筋の分かれ道が走っているのだ。いずれも相馬軍による伊達郡遠征の際に通り道・関門とされ、天文の乱当時も、行方郡の小高を本拠とする相馬顕胤の軍勢が幾度となくここを通過して、懸田氏の助勢に駆けつけている。

相馬氏は、乱終結後間もなく急病に斃れ夭折した顕胤の跡を、若年の嫡男盛胤が継いでいた。爾来暫く、盛胤は自領内の統治に力を注がねばならぬ状況となり、それは晴宗が懸田討伐を容易に成し遂げ得た要因にもなっていた。

尚義一行が小手道を北上すれば、月見館本館は右手に現れる。それ自体は小型の山城であるが、周囲は塩松の中心地にも劣らぬ活況となっており、川俣以降人の往来も増えていた。これが伊達領の南限の一関門であることを併せ考えるに、斉義は伊達家の規模の大きさに打ちのめされる思いがした。その様子に気付いたのか、尚義は気分良さそうに馬に揺られている。

一行は関所通過後、懸田から小手道はずれ、保原城へ至った。ここまでが一日の行程である。

当城は晴宗の功臣中島伊勢の居館である。現在の流れとは離れたが、当時の当地は阿武隈川の氾濫原上に存し、川から導水して堀を為し、曲輪を形成する平城としてあった。

尚義と斉義は、この城内で晴宗に対面した。

「これは塩松殿。ご足労いただき恐縮」

「我らにできることあらば、何なりと申しつけくだされ」

斉義は二人の様子を窺っている。尚義は幾分緊張が表情に出ているようだ。

晴宗は口元を小さく歪めているが、どうやらそれが喜んでいる表情らしい。されどその造作は、鋭く厳しい目つきともあいまって、神経質な性格をよく醸し出していた。

「輝宗は些か猜疑が過ぎるようだ。気持ちは解らぬでもないがの」「と、言いますと」

輝宗が警戒しているのは、今伊具郡で起きている紊乱そのものだ

けではなく、その処理如何によつては領内のどこまでも飛び火し得るという家中の統治体制にある。

今回、田手宗光への対応が余りに寛大な処置では、家臣達は皆、主家を甘く見るようになるだろうと考えているのだ。

現に中野宗時の動きは余りに輝宗、延いては主家を蔑ろにした行為であり、晴宗の意を受けたものでは勿論ない。

晴宗はそれを承知しながらも、長い間苦楽を共にしてきた重臣達をただ見殺しにする訳にも行かなかった。

また、輝宗の意見通りに締め付けを強めれば、家中諸士の反発を招き、家が四分五裂してしまうかも知れないという懸念もあり、ずるずると斯様な状況へと落ちてしまったのだ。

この状況を正しく理解していれば、晴宗とて始めから尚義に調停そのものを期待などしていないということは、判ろうものだ。

即ち、現在の伊達家中を元の鞘に収められる者は、一人しかいない。

「塩松殿には、丸森まで行って貰いたいのだが……」

尚義の表情に一瞬緊張が走った。

「すると、円入殿に仲介の労を執っていただくという訳ですな」

晴宗は石母田から伊具入りしようとして、輝宗から鉾先を向けられた。

そこで、尚義に伊具入りして貰い、同郡丸森村で隠居している植宗に仲介を頼もうという訳である。

人畜無害な尚義なれば、輝宗とて何の謂われもなく攻撃を加えることはあるまい。

植宗は天文の乱の和睦条件に従い、丸森を始めとする周辺五箇村を隠居扶持としてあてがわれ、その後入道して直山円入を号していた。

伊達家政の表舞台から遠ざかって暫く経つが、家中諸士及び周辺諸氏への影響力はまだまだ保っている筈である。殊に相馬氏とは乱後も引き続き懇意にしており、これ以上の適任者はいなかった。

漸く話が通じ安心したのか、晴宗は斉義を向いて表情をほんの少し緩めた。それでもその視線は、慣れぬ斉義にとってまだまだ威圧を感じるものであった。

「そちらが太郎殿じゃな。噂に違わぬ面構えをしている」

斉義は油断していた。突然に話を振られたことに動揺し、晴宗の視線に思考能力を奪われ、何と答えてよいやらまるで言葉が浮かんでこない。

しかしそこへすかさず、尚義が嬉しそうに話に割って入った。気付けば、当初の緊張はもうすっかり散じている様子である。

「伊達殿の推挙がなければ、手持ちの人材に気付かぬところでした」

「暫く見ぬが、備前は元気でしょうな。当方が落ち着いたら、どうか一度遊びに遣わしてください」

斉義は、晴宗が言った自分に関する「噂」とは如何なる噂か、婿入りの話を自分に持ってきたときの実父備前義綱の表情と併せて、気になった。

天文の乱の折、植宗党だった尚義を晴宗党へ導いたのが義綱である。

当時から義綱は伊達通となっており、殊に晴宗の塩松番となっていた石母田安房とは懇意にしていた。

安房は塩松訪問の際には小浜に幾度も宿泊しており、斉義も幼い頃からよく見知っていた。その辺りの筋から、自分に関する何らかの情報が伊達にもたらされ、婿を探している尚義へ推薦するという過程があつたのだろう。

また、斉義の弟親綱の室も、この筋を経由してあてがわれている。中野宗時の娘がそれである。

晴宗は表情を動かすことは殆どなく、媚びるように明るい表情をコロコロさせている尚義とは対照的だった。

翌日、一行は晴宗から預かった書簡を携え、丸森に入った。

丸森城は、阿武隈高地の北辺から西へこぼれた突端部に位置する山城である。

麓を南から西を経由して北へと、本丸を三方から囲繞するように内川が流れ、阿武隈川へ注いでいる。城は西側の川に突き出た曲輪

を頂点に、東へ連なる梯郭式となっており、古来伊具郡の中心として、そして阿武隈廻船の中継基地として、栄えてきた場所柄である。

尚義の表情は、保原を出たときから緊張でこわばったままだった。晴宗と会ったときの比ではない。

植宗と晴宗はとうに和解しているとはいえ、寝返った尚義にとっては、やはり依然として会うのにはつの悪い相手ではあった。

植宗は、白銀の総髪に袈裟をはおり、穏やかな表情で一行を迎えたが、その所作はすっかり老爺の趣となっていた。

「塩松殿、久しいのう。そちらがお嗣子か」

尚義は、植宗の優しい言葉にすっかり恐縮し、「あの」とか「はあ」しか発せないでいる。それを差し置いて斉義は、保原での失態を挽回するように、意気込んで挨拶した。

「お初にお目にかかります。太郎左衛門斉義にござりまする」

「うむ。利発そうな若人じゃ。当家の総次郎殿とは、歳も近かるう。相馬の孫次郎殿と同年くらいかの。どうか皆、末永く仲良うして欲しい」

相馬の孫次郎とは、盛胤の嫡男義胤のことである。相馬氏と懇意にしていた植宗は、丸森に遷ってから一層相馬をいたわり、末娘を義胤に嫁がせている（後に離婚する）。

尚義は、植宗と斉義の会話で漸く少し緊張がほぐされ、用件を伝えた。

「保原より書簡を預かって参りました」

植宗は受け取った書簡に目を通した。

「総次郎殿は早熟じゃ。若気の血気にうかされて足元をすくわれぬよう、儂からも一寸言つてやらねばとは思つておった。……ところで塩松殿、御辺らはこれから何処かへ攻め寄せようという趣向かの」「えっ。いや、あの……」

塩松城を出たときから尚義は大鎧、斉義は当世具足を身に着け、他の武者も胴丸・腹巻を着用、すっかり臨戦態勢を整えている。保原で一泊して状況が大方見えてきても、尚義が総武装を解かない以上、諸士もそれに追従せざるを得ず、連日軍容を調べての行進は行列の全員が負担に感じていた。

「助力を請け負って貰えるのは有り難いが、そのなりでここに居られては、却っていらぬ混乱を招きかねん。通達の旨は承ったので、早う戻って晴宗へ伝えてくだされよ」

尚義の顔は赤くなつて、再び固まつてしまった。

一行はそのままとんぼ返りで丸森を発つと、途中再び保原にて晴宗と面会、城下で一夜を過ごし、翌日往路と全く同じ道を辿って塩松へ戻った。

結局、この混乱はその後も収まらず、収束まで数年を要す。

晴宗は混乱が終結したら輝宗に跡目を譲るとし、輝宗は現況のままで跡目を継ぐことを望んだ。

問題は、中野や田手といった旧来の重臣が輝宗を蔑ろにして家政を牛耳ろうとしている、という疑いがあることである。

晴宗が何とか穏便に済ませたいと輝宗に寛恕を求めても、輝宗は誅伐を主張して譲らなかつた。しかし、まだ正式の当主にならない輝宗の手勢だけでは、それらの勢力を討伐することも叶わない。

この間、植宗はずっと和解への道を探り続けていたが、その道は開けぬままに体を壊し、枕の上がらぬ身となつた。

結果、これを機として父子は漸く互いに歩み寄りを見せ始める。そして「田手氏の家格を一門から一家に下げて所領も減封するが、

他には手を出さない」という条件を輝宗が呑み、正式に跡目が譲られる運びとなった。

だが、この一応の解決に、植宗は間に合わなかった。享年七十八。その逝去は永禄八年六月。輝宗の後継はその後間もなくであった。

晴宗は、立場は変われどその後も杉目に住し続ける。

輝宗も跡目こそ譲られたものの、中野宗時一派が依然輝宗に出仕せず、家士を代理人として用を足していることに対し、何の手出しもできずにいた。

因みに、この宗時の家士の名を遠藤文七郎という。

結果として宗時はますます増長してゆき、元龜元年（1570）に至って、遂に輝宗との間に戦端が開かれる。

そして戦さに敗れた宗時は相馬へ逃れ、更に会津へ流れてゆく。

この戦いで文七郎は輝宗に内通し、その信任を得、第一の側近としての地歩を踏み出すことになる。後の遠藤山城基信である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0073z/>

変節

2011年12月2日22時54分発行